

そうごうふくしぶかい だい 17 回 総合福祉部会 第17回	
H23.8.9	さんこうしりょう 参考資料 2
ひろたいいんていしゅつしりょう 広田委員提出資料	

せいしんしょうがい りはびりてーしょん だい かんだい
精神障害とリハビリテーション 第15巻第1
ごう つうかんだい ごう
号（通巻第29号）

とくしゅう りはびりてーしょん ふろせす ききてきじょうきょう たいおう
特集 リハビリテーション・プロセスにおける危機的状況への対応

ぴあさぽーと げんば
ピアサポートの現場から

ひろたかずこ
広田和子

1 はじめに

せいしんいりょう ひがいしゃ じたくうち ご てら い にんげん しんらい
精神医療の被害者として、自宅内かけ込み寺を活かし、人間としての信頼
かんけい もとづいたご本人の健康度と可能性を信じる住民としての活動がふ
さわしい紹介です。

2 大事なのは環境ですよ

やかん きょじゅうく かんかつ けいさつしょ おとす ベンチ ろうふじん さい
夜間、居住区を管轄する警察署を訪れると、ベンチに老婦人（74歳）が
リュックサックを背負って、大きな荷物を両手いっぱいを持って、にこやかに座
っていました。「こんばんは！ どうしたの？ こんなに夜遅くに警察に来て」
と私が聞くと、「ねえ。一緒に私の家へ来てくれない？」と言われました。「い
いけど、お宅はどこなの？」「すぐそこなのよ」「お名前は？」「柳田（仮名）で
す」「柳田さんね。じゃー、早速行きましょ！」ということで、こ柄な柳田さ
んと並んで、ゆっくり警察署玄関のスロープを下り、柳田さん宅へ向かい
ました。

やなぎだ たく ばすとお はい ほそ うらみち めん さんけんながや おく
柳田さん宅は、バス通りを入った細い裏道に面した三軒長屋の奥にあり、
ぼうはんらいとがぱつ ひいたので、「明るいわね」と私が言うと、「こないだ付けた
ばかりなのよ。これがあれば、犯人がこないかもしれないと思っつけたの」と
い言いながら、やなぎだ げんかん かぎ ひら いるぐち でんき ひ
柳田さんは玄関の鍵を開け、入口の電気を灯けました。

まど だんぼーる おお だんぼーる ふた
すると窓がダンボールで覆われていたので「なんでダンボールで蓋したの？」
と聞くと、やなぎだ にお おく こ まれて いるから ふた をしているの」と言い

ました。

畳の上には、一面新聞紙が敷きつめられ、その上に中身の入った大きなビニール袋が積みあげてありました。「この新聞紙は、なんで敷いてあるの？」と聞くと、柳田さんは「犯人の足跡を警察に持っていけば捕まえてくれるかもしれないから」と答えます。

「それで柳田さんは、この新聞紙の上に寝ているの？」と聞くと、「前は、新聞紙は敷かないで、昼間3時間、ここで寝ていたけど、今は、昼間も犯人が臭いを送り込んでくるので、地下鉄のトイレで3時間寝ているのよ」と言われ、私は「じゃー、いつ家にいるの？」と聞くと、「家にいると犯人が臭いを送り込むので、ほとんどいられないから、夜中の1時まで警察にいて、1時になったら、前のコンビニでおにぎりを3個買って、立ったまま食べて、地下鉄が走りだしたら、地下鉄のホームに座っています」と答えました。「食事はどうしているの？」と聞くと「朝昼晩、三食、昔からいっているお店にっています」ときちんとした答えが返ってきました。「洗濯物は？」「コインランドリーでやっているけど、下着は・・・商店街で、安いのを買って、汚れたら捨てているの」と合理的な答えをされました。

「柳田さん！ 私、帰るけど、どうされますか？」と言うと、「おたくが、ここに泊ってくれれば、私もここで寝るけど、一人じゃ、犯人が、また臭いを送ってくるので、私も警察に戻る」と言って、荷物を持ち出そうとしたので、「だって、柳田さん！ 私に泊ってといっても、布団がないんじゃない？」と言うと、「私は布団を使わないので、おたくが使う分はあるのよ」とうれしそうに言いました。

「柳田さんは布団を使わないで、畳の上に直にねているのね」と言う、「そうなの」と言われ、「風邪ひかないの？」と聞くと、「慣れたのよ。だって、布団に入っていると、犯人が、臭いを送り込んできたとき、すぐ逃げ出せないの」と大きな声で力説されました。

「柳田さん！ 警察へ戻りましょ！」と言って、また二人で警察署へ戻り、私は柳田さんがおにぎりを食べているコンビニへ一人で行き店長と話を伺ったところ、店長は「私どもは商売をしているので、お客さんが、おにぎりを買

つてくれてここで食べても朝まで店内にいても、基本的には何も言いません。しかし、彼女の**場合**、他の**お客さん**たちからクレームが入って、正直困っている**ので**、明日にも、警察へ**言って相談**しようと思**っていた**ところ**です**と言**いま**しました。

私は警察署へ**戻り**「柳田さん！ 私の家の**かけ込み寺**で寝て**み**ない？
一緒に**帰**りましょ！」と言**う**と、柳田さんは「はい」と答**え**た**ので**、警察官に事情を説明して、二人でタクシーに乗**っ**て、わが家に**帰**りました。

家に着くと、私はわが家の6畳“**かけ込み寺**”に案内して「柳田さん！ 今日からここがあなたのお部屋。安心して寝て下**さ**いね。倒れると困るので、お風呂は今まで通り外で入**っ**て、食事も行きつけの食堂にしてください。洗濯も今まで通り」と私は言**い**ました。

柳田さんが「どうもありがとう」と言**っ**た**ので**、「私は夜遅く帰**っ**てくるので、待ち合わせは、あの警察。それと朝遅い**ので**、出かけるときは、玄関の鍵を開けて出かけてね」と言**っ**て鍵を開ける練習を**し**てもら**っ**てから「なにかわからないことありますか？」と聞**き**ました。彼女からの質問は**な**にもありませんでした。

わが家で柳田さんは、寝息をたててよく眠**れ**ていた**ので**、一週間後、私は「よく眠**れ**ているから介護保険を使**っ**て、デイサービスでお風呂に入り、家へホームヘルパーさん**に**来てもら**い**お掃除**し**てもら**っ**たりすれば、自宅で暮**ら**せると**思**う**ので**、地域ケアプラザと柳田さんの話を聞**い**たり手続**き**してくれる保健所**と**う**い**ちに行かない？」と提**案**したところ、ご本人が同意された**ので**、二人で出**か**けて**み**ました。

保健所からの帰**り**道、柳田さんが「いつもの車**が**跡**を**つけてくる」と言**っ**た**ので**、「どの車？」と聞**く**と、「前から4台目の黒塗りの車」と言**わ**れ、「なんのために、誰**が**つけているの？」と聞**く**と、「私**に**臭**い**を送**り**込**ん**でくる人**た**ちで、これだけ、大**が**かりなんだから〇〇教(カルト宗教)としか考**え**られない」と大**き**な声で力**を**込**め**て言**わ**れました。

「柳田さん！ あの車は、柳田さん**を**つけてくる**の**ではなくて、走**り**去**っ**てい**く**だけよ。柳田さんの感**じ**方**っ**て、私**か**ら見**る**と被害妄想**だ**と**思**うのよ。

もし病院へ行きたくなったら、今、行ってきた保健所に息子さんと一緒にいく
といいわよ」と私は言いました。

一週間後、柳田さんの姿は待ち合わせ場所の警察から消えました。しばらくして関係者から「柳田さんの件ですが、広田さんの所でお世話になって、ご一緒にこちらへ乗られたので、お知らせしています。〇〇病院へ入院されたのでご安心下さい」という丁寧な電話を受けました。私は柳田さんのことを気にかけてくれていた警察の人たちに、「柳田さんが入院した……」ことを伝えましたが、その後、忙しさの中で、私は柳田さんのことをすっかり忘れていました。

半年後、警察のロビーで再会し「あら！ 柳田さん！ お久しぶり」というと。柳田さんは「頭がおかしくなったと思って精神病院へ行ってきたけど、昼寝かされ、夜寝かされ、これでは足腰たたなくなっちゃうと思って退院してきたの」といわれ、「そうだったの。それでこれからどうするの？」と聞くと「お宅へ行く」とのことで、その夜から、また、かけ込み寺に滞在するようになりました。

すると、ある日、「柳田さんが朝早くあるいているけど、広田さんが寝ているのに鍵が開いていると、空き巣が強盗に変身する可能性があって危険ですよ」と交番相談員が注意してくださった。私が柳田さんに事情を話して「だから10時まで出かけないで……」と言ったところ、柳田さんは翌日からそれを実行されるようになりました。警察の当直主任からは「待ち合わせしている柳田さんが、居眠りして危ないと思うときがある」といわれ、私が海外研修等で長期留守にするときなど、郵便物を家に入れてもらうために鍵をあずけておく近所の人に事情を話して、「柳田さんが帰ってきたら、鍵を開けて、家に入ったら外から鍵をかけて下さい。」と依頼しました。柳田さんは、私が深夜帰宅するとよく眠っていて、私が原稿を書いている、お手洗い帰りの柳田さんが私の横を通るとき、「柳田さん！ お元気？」と聞くと、「はい、おかげ様で」といわれました。

ある日、朝早く目覚めた私が「柳田さん！ なんで、この家だと眠れるのか

しら？」と聞くと、「おたくがしょっちゅう交番や警察に行っているから、犯人は、おたくのことを警察官だと思っっているのよ」といわれ、私が「柳田さんの息子さんの方こそ神奈川県警の本物の警察官じゃない」と言うと、「息子は、交番で三日おきの仕事だから、犯人は警察官だと気がつかないので、息子の家にも私が泊っていると、臭いを送り込んで孫も危ないので、息子の家には泊まれない」と言いました。

柳田さんが入院した病院に勤務する信頼している医師に、「柳田花子さんをご存じですか？ かけ込み寺に滞在中ですが」と言うと、「彼女を知っていますが、あれだけの被害妄想を消すためにはよだれを流す程度の副作用を伴う必要があります。それより彼女にとって大事なものは、いい環境ですよ」と言われました。

半年後、柳田さんは、わが家に隣接するアパートの高齢者が引っ越しされると、「……引っ越しするところを見ていたのよ私、やり直したいのよ。……不動産屋さんはどこ？」と言って、そこへ引っ越しされました。6カ月間、私に毎月2万円ずつ渡されていた12万円を私が柳田さんに返金すると、柳田さんからわが家に立派な布団一式が届きました。

3 信頼

横浜市内の信頼関係のある警察官から「管内に住む16歳の少年から「これから死ぬ」と言って、〇〇歩道橋の上から110番通報を受け、警察官がかけつけ保護して、家へ送ったのですが、そのあとで「薬を……飲んだ」と119番通報を繰り返しています。われわれも消防も困っています。なにより、本人にとっても、胃洗浄の繰り返しをしては、身体によくないと思いますので、広田さんのことを紹介したいのですが……」という相談を受けました。

私が「わかりました。その少年に、私の電話番号を知らせてみてください」と答えると、「……少年の名前は誠君（仮名）です。どうぞよろしくお願ひします」と言われました。

その翌日、誠君からの電話を受けたので、「私は、危機介入相談員という

のをやっていて、家には“かけ込み寺”という部屋もあるので、よければ泊まり込みで来てみない？若い君の話をゆっくり聞いてみたいのよ」と私は彼に言いしました。

誠君が大きな声で「行きます」と言ったので「パジャマは持ってきてね。それと枕にかけるカバーに使うタオルもね」と私が言うのと「はい！ よろしくお願います」と誠君から元気な返事が帰ってきました。

誠君がオートバイに乗って初めて来た日、相談者達とよく行っていたちゃんこ鍋を食べたような気がします。「中学校……年生の時、いじめられて、ひどいことも……の時されたので、証拠もあるから、教育委員会と……先生を訴えてやりたい……」と理路整然と話をし、家庭内のこともいろいろ話されました。

私は「そういうことがあって、君が歩道橋の上から110番通報したり、119番通報していたのね。16歳の君にとって、今でも学校のことはくやしいだろうし、家庭内のことも大変なのよね。君の気持ちはよくわかったわ。でも、だからと言って、110番通報と119番通報を繰り返しているのは、くくないと思うわよ。110番は事件や事故等を知らせたり、解決してもらうための緊急用警察電話で、119番も病気やけがをした人のための緊急用電話でしょ！ 救急車の場合、横浜市内に63台（当時）あって、通報を受けて平均6分で現場に到着しているけど、110番も119番も生命に関わるセーフティネット（安全網）とあって、人間が生活する上で、とても重要なところなのよ。それをみんなが理解して、大事に緊急の時だけ使わないとね。誠君は頭よさそうだから、理解できるわよね。それになにより、胃洗浄を繰り返しているのは「誠君の身体によくないと思います」と言って〇〇警察の人が、誠君のことを心配して私に電話をくれたのよ。君のくやしさや大変さは、広田かずこさんが君の相談員として、夜中の2時まで、電話に出られるときは受け止めるから、110番と119番通報しないと約束できるかな」と私は聞きました。

すると誠君は、「はい！ 約束します」と大きな声で返事をしたので、「午前2時すぎは、広田さんも寝ないと倒れちゃうから。広田さんが倒れちゃうと、困る人がたくさんいるのよ。誠君も大変だけど、世の中には、大変な人がたく

さんいるのよ」と私が話をすると、誠君が「相談員の広田さんも、僕のような相談者がいて、大変なんですね」と同情気味に言ったので、「生きていればいろいろあるのよ。君は賢くてやさしい子ね」と私は言いました。

誠君は「広田さん！ 今後、家に来て、家族みんなに会って、僕の話聞いてくれたみたいに、みんなの話聞いて下さいね」と笑顔で言ったので、私は「君は16歳の少年で親の保護下にあるのだから、君のこと以外は、親に聞いてみませんか」と答えました。

誠君は私との約束を守り、110番通報も、そのたとかけていた119番通報もしなくなりました。

冬に入り、誠君から「広田さん！お元気ですか？」という電話をもらって、「なんだか暑いよ」と私が答えると、「今日は寒いですよ。熱があるんじゃないんですか？ 体温計で計ってみたらどうですか」とアドバイスされたので、「そう思っているんだけど、体温計が見つからないのよ」と言うと、「わかりました」と誠君が言って電話が切れました。

30分ぐらいうると、誠君が「こんにちは」と、わが家に現れて、「広田さん！これで、体温を計ってみてください」と言いながら体温計を渡してくれました。「あら、ありがとう」と言うと、「僕はこれで、おかゆを作りますから」と、うれしそうにビニール袋に入れたお米を見せられました。私は「あら、なにからなにまでどうもありがとう」と言って、体温を計り、キッチンには行かずに、誠君におかゆ作りをおまかせしておきました。

そして、誠君が作ってくれたおいしいおかゆをいただきながら、「ねえ、誠君、料理人が、なにか、食事を作る仕事に向いているんじゃない？ 私より上手にできているわよ。昔は私も上手にできたんだけど、今は、料理する気持ちになれないのよ」と私が言うと、誠君は「いいんじゃないですか、広田さんは忙しい相談員ですから、僕が110番通報しなくなったのも、119番通報しなくなったのも、みんな広田さんのおかげですからね。広田さんはいつまでも長生きして、僕の相談員でいて下さいね」と言ったので、私は「いつまでも相談員の私に依存しては、君にとっても、広田さんにとってもよくないでしょ！相談者は相談員から卒業するものなのよ！誠君は立派に110番通報と

119番通報から生還できたんだからね。でも、中学校の卒業式も出られなかったんだから、まだ卒業は早すぎるわね。今日は、本当にどうもありがとうございました」と言いました。

誠君は「広田さん！ 僕の話聞いてくれたみたいに、僕の家にも来て家族みんなの話聞いて下さい」と言って帰って行きました。

その後、「教育委員会と〇〇先生を訴えたい」という誠君の気持ちが強くなり、「家族とのこと」でも誠君の頭を悩ませていたので、外で父親に会い、お話を伺うと、「誠の件では、私も大変な思いをしていて、……私も訴えたいぐらいです」と言われました。

私は「現在の生活に関して困っている……に関して、私の信頼している弁護士さんと会ってみませんか？ 教育の方は、気持ちはよくわかりますが、公務員が、謝れない体質だと私は思っています。裁判所に訴えるといってもお金もかかるし、方にひとつ裁判に勝てたとしても、今の日本を見ていると、教育現場が変わるとは私には思えません。目の前に立ちふさがっている……に関して問題を解決することが、お父さんにとっても、私の相談者である誠君にとっても大事だと私は思います。奥さん達とよく話合ってみたらいかがですか？ それと、誠君から「家に来て下さい」とお誘いいただいていますので、そのうち伺おうと思いましたが」と言いました。

お父さんは「弁護士の件はぜひ紹介して下さい。……の件が解決できないと、私の具合も悪くて。家にもぜひ来て、母や妻や子どもたちにも会って下さい」と言いました。

そこでまず誠君の案内で、自宅を訪問して家族全員とお会いすると誠君の全体が見えたので、お父さんに弁護士を紹介し、家庭内の問題は弁護士に解決してもらうことにしました。

お父さんに弁護士を紹介後、「広田さん！ 僕にも弁護士を紹介してください」と誠君は長いこと言っていました、私は「いいえ。あなたは、未成年なので、紹介できません。親に言って下さい」と言うと、「広田さんは僕の相談員でしょ！」と言われ、「そうよ。相談員としても人生の先輩としても言わせてもらえば、あなたが立派な大人になることが大事だと私は思います。あなたのく

やしい^{きも}気持ちを^{りかい}理解しているけど、^{じんせい}人生は^{なが}長い。これからどう^い生きるかが^{だいじ}大事よ」と^{わたし}私は^い言いました。

その後、「^{うった}訴えてやる^{しょうこ}証拠を持ってきました」と^{きつし}冊子を^{わた}渡され、「たしかに^{わたし}私も^{がっこうがわ}学校側の^{はいりよ}配慮が^た足りないと思^{おも}うけど、もし^{わたし}私だったら、^{おとな}大人になってから、そのときどうするか^{れいせい}冷静に^{かんが}考えてみます。^{まことくん}誠君を^{りかい}理解しているけど」と^{わたし}私は^い言いました。

それでも^{まことくん}誠君は110番^{ばんつうほう}通報することもなく^{しない}市内の^{ちゅうかりょうりや}中華料理屋^{ある}さんでアル^{ばいと}バイトを^{はじめ}始め「^{ひろた}広田さん！^{ぼく}僕が^{つと}勤めている^{みせ}店へ^た食べに^き来てくれませんか」と^{さそ}誘ってくれたので、^{きやく}お客さんとして^い行くと、^{しろ}白い^{せいふく}制服^{さた}姿で、^{えがお}笑顔で^{うれし}うれしそうに^{はたら}働いていて、^{ふゆ}冬の^ひ日に^き来てくれて^{おかゆ}おかゆを^{つく}作ってくれた^{おも}ときの^だことを^{おも}思い出しました。

その^{しごと}仕事を^や辞めたあと、^{せいしんてき}精神的に^{ぼらんす}バランスを^{くず}崩したときなど、「^{うった}訴えてやる！」^いと言ったり、「^{まわ}お巡り（^{けいさつかん}警察官）が」との^{でんわ}電話を^{して}してくることも^あありましたが、^{くる}苦しいときも110番^{ばん}せずに^{やくそく}約束を^{まも}守り、「^{まえ}お前を^{ころ}殺すぞ」とか^{ほうか}「放火するぞ」と、^{よなか}夜中に^{でんわ}電話を^かかけてきたときでも、^{わたし}私が^{ぼじていぶ}ポジティブな^いことを^いひとこと^い言うと、^{まことくん}誠君は^{しず}静かに「^あありがとう^ごございます」と^い言^{でんわ}って^き電話を^き切ってくれました。

^{ある}ある日、^{わたし}私は「^{まことくん}ねえ。誠君。主治医を^か変えて^{わたし}みない？ 私の^{しんらい}信^ら頼している○^{くり}クリニックの^{やまだせんせい}山田先生」と^{ていあん}提^{まことくん}案^{いっしょうにゆういん}してみ^ましました。誠君は^{必要}たぶん一生^{ひつよう}入院の^{わたし}必要^{おも}もない^{まことくん}だろうと^あ私は^{やまだせんせい}思^いい、誠君に^あ合^{やまだせんせい}い^いそうな^い山田先生に^いしま^いした^いが、それが^あ当たり、^{まことくん}誠君は「^{やまだせんせい}山田先生が「^{ひろた}広田さん^いによろしく」と^い言^いっていましたと^か、^{じぶん}自分と^{せんせい}先生の^{かんけい}関係^{はな}を^{はな}話^いす^いよう^いになりました。

^{ある}あるとき^{まことくん}誠君の^{はなし}話を^{もち}用^{まことくん}いていて、^{やまだせんせい}誠君の^{とまど}ことで^{やまだせんせい}山田先生が^{とまど}戸惑^{とまど}っている^{とまど}んだと^{かん}感じ、^{せんせい}先生が^{しゅつせき}出席する^{かい}会に^{わたし}私も^{さんか}参加^{かいしょくとき}して、^{まことくん}会食^{まことくん}時に「^{まことくん}誠君の^{こと}、あ^いりが^いとう^いござ^いいます」と^い言^いうと、「^{かれ}彼は^し死ぬ^いかもし^いれない」と^い言^いわれたので、^{わたし}私は^{むね}胸を^{たた}叩^いき、「^{わたし}私が^{だいじょうぶ}居るから^い大丈夫」と^い言^{まことくん}って^{はなし}誠君の^お話を^お終^いわり^いに^いしま^いした。

それから^{じかん}時間は^{なが}流^{まことくん}れて、^{ひろた}誠君が「^{ぼく}広田さん！^{ひろた}僕に^{しょうかい}広田さんを^{しょうかい}紹^い介^{まことくん}してく^いれた^{まことくん}警察官^いはどこに^いる^いのですか。^あ会^いえ^ませんか。」と^い言^いいました。^{わたし}私は「^{まことくん}誠君。^{にんげん}人間が^{だいじ}まんする^いことが^い大事^いよ。と^いくに^{いま}今^{わか}の^{ひと}若い^い人^いには、^{けいさつかん}警察官が^{ていねん}定年^いにな^いつたら^あ会^いいま^いしょう^いね」と^い言^いいました。「^{ひろた}広田さんが^し死^いんだら^いそう^いなる^いんですか」

と言ったので「大丈夫。私が相談活動などで預かっている物等が入っている貸金庫の中に誠君と警察官の書いた紙も入っているの」と言う。「でも、広田さん！長生きして下さいね」と言って、一生懸命働いたし成長しています。

先日、誠君は久しぶりに電話で「広田さん！・・・山田先生のお陰ですよ」と言ったので、「よかったわね」と言う、「でも、広田さんが山田先生を推薦してくれたんだから、広田さんのお陰ですよ。広田さん！また、一緒にちゃんこなべた鍋食べましょうよ。僕のおごりですよ」と言われたので、「いつかね。楽しみにしているわね」と言いました。

4 まとめ

柳田さんが、わが家のかけ込み寺から出る際、私は不動産屋の小林さんの所へ行って、「柳田さんが来ますので、よろしくお願いいたします」と言いました。小林さんから「よろしくって、入れるの？断ればいいの？」と聞かれたので、「入れてください。大家さんも了解されていますので」と私は答えました。

柳田さんはアパートでなんとか2年半暮らして、けがをされ、息子さんたちの話によれば、老人ホームに入れられたそうです。

私が、不動産屋の小林さんに出会ったのは、1989年春のことですが、そのとき、私は「腰痛で働けず、生活保護で・・・」と自己紹介しておきました。

10年後引っ越すことになり、横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使うため、患者であることを名乗りました。すると小林さんは、「そうだったの。最初、お母さんと一緒に来たときから見ると、だんだん活発になってきて、病気がよくなったのね」と言われました。

私が「病気じゃなくて、1988年3月1日に医療ミスの注射を打たれて、その副作用がまだ残っていたんです。副作用のために緊急入院もしました」と言ったところ、「大変な思いをしたのね。ミスなんて、ひどい医者じゃない」と小林さんは怒っていました。

その後、私が、「相談活動もしている」ことを話すと、小林さんから「あなたがいるので、うつの人に家をお世話したから、なにかあったら話を聞いてあげ

て」と言われ、この件をきっかけに、何人もの精神障害のある方が入居できるようになりました。精神障害者が地域で生活していくためには、住宅政策が、24時間安心して利用できる精神科医療とともに最重要課題です。

こうして誰もが、自分のできること住民として行えば、税金を使わないで“豊かな地域社会”が実現し、子どもにも、障害者にも、高齢者にも、誰にも“いい環境”になります。

私の被害は精神医療だけでなく、福祉、行政にもおよびましたが、それはいずれも本人不在の状況で起きたことです。私は、信頼関係を大事にして本人の健康度と可能性を信じて向き合えば、過った判断は防げるとおもっています。

また、この事例を通して、私のような危機介入相談を仕事にしては困ります。私は、国および地方自治体委員を精神医療の被害者である精神医療サバイバーの立場で担っていますが、委員会等はコンシューマーのためでなく“専門家のためのハローワーク”だといつも感じているからです。